

12) ナツズイセン=夏水仙

ナツズイセンはヒガンバナ科の多年草で、本州、四国、九州の里山などに分布し、鑑賞用として庭園などでも栽培されている。ヒガンバナと同じように地中には径 5cm ほどの鱗茎があり、冬から夏にかけて艶のある白緑色でヒガンバナよりもずっと幅の広い広線形の葉を出す。この葉は花が咲く頃には枯れて、8 月中旬頃になると、いきなり花茎が 60cm ほどに伸びて、茎頂に淡紅紫色でラッパ状の花を 5~6 個つける。和名の由来は葉がスイセンに似ており、夏に花を咲かせるため、ケイセイバナとかピーピーグサなどと呼ぶ地方もある。また花時に葉がなく、ユリに似た花を咲かせるところから裸ユリとも呼ばれる。他方、韓国では花と葉が同時に出ることのないために、葉は花を思い、花は葉を思うという意味で『相思華』と呼んでいる。江戸時代の末期(1862 年)に発刊された飯沼慾齋の『草木図説』によれば、

「インヂアーンナルシスに似る。[中略] 色淡紅紫。六雄葇(おへ)下瓣に
そひて長く瓣外に出。葯黄色。一雌葇更に長し。」

と記されており、すでにスイセンのことを「ナルシス」と呼んでいたことを、合わせて知ることができる。学名は『*Lycoris squamigera*』で、属名はギリシャ神話の海の女神『リコリス』に由来する。また種小辞は鱗片を持ったという意味で、これは球根の形状を表現したものである。それにしても江戸時代の末期とはいえ、このように外国語を取り込みながら、書物を作っていたことに対して驚くとともに、当時の日本人の外国語吸収力に、脱帽せずにはいられない。ただ日本人は古くからカタカナを巧みに用いて、表現力を多様化させることに傾注しており、このカタカナを外来語の表音に当てたことによって、外来語をマスターする上で、大きな役割を果たしたであろうことは否定できない。

ナツズイセンはかなり古い時代に中国から帰化したと思われるが、その時代は定かではない。全草にリコリンを含んでおり、麻痺、痙攣、嘔吐などの中毒症状を起こす有毒植物ではあるが、有毒植物の常で薬用植物でもある。有効成分はアルカロイドのガラントミンで、秋に鱗茎を掘り取ってよく水洗いし、おろし金で摩り下ろし、腫れ物や乳房の腫れなどに塗布して用いる。スイセンと同様の薬用効果があり、正に夏に花を咲かせるスイセンなのである。またガラントミンは最近ではアルツハイマー病の治療薬としても用いられている。

さてこの花のいいところは、何ととっても花の少ない季節に、突如として咲くところである。そしてナツズイセンが咲き始めると、もう秋はすぐそこまで来ている。どんなに暑い日があっても、長くは続かないのである。陽当たりを好むので日影にならないところに植えて、分球をこまめに行なえばよく殖えるし、たいした手をかけなくても、毎年美しい花を咲かせてくれる。しかし花屋さんではあまり売られていない球根植物なので、手に入れるのに多少苦勞するかも知れない。



秋の訪れをそっと教えてくれるナツズイセン。8 月中～下旬、突如として花茎を伸ばし、彼岸花によく似た花を咲かせる(埼玉県深谷市)。



ナツズイセンによく似た花を咲かせるアマクリナム。1921 年にアメリカで人工的に作り出された球根植物である。暖地性で、やや乾いた肥沃地を好む(さいたま市緑区)。 [目次に戻る](#)